

第七章 アユ村を出る

わずか7日間の滞在調査は、人類学のフィールドワークとしては、全く十分なものではない。本報告書は、戸別調査や村人の主な生業である農業についての数字データなしに、殆ど聞き取りデータのみによって書かれている。漢語からの借用語が多いアユ村のラフ語は、話によっては十分理解できないこともあったし、実際の観察の伴わない聞き取りには誤りがつきものである。またアユ村の置かれた中国雲南の歴史・社会的なコンテキストに関しては、もっと文献・資料などを利用する必要があるだろう。一方で、中国での少数民族に関するフィールドワークは、可能になってきている部分もあるが、いぜんとしてさまざまな制限が伴っている。本報告書は、より長期の本格的フィールドワークによって乗り越えられるべきものであるが、それでも7日間アユ村に滞在して住民から聞いた話を、ひとまず記録に纏めておくことは多少意味のあることではないかと考える。

筆者は、アユ村に来て7日目の朝に村を離れることにした。アユ村滞在中の3日目ぐらいいからは、郷政府の役人が何度も村にやって来て、筆者の行動を調べていた。6日目には、郷政府から送られてきたらしい男が、筆者が宿泊していた村公所の別の一室に滞在するようになった。男はラフ語を解さないとしたが、筆者が村の写真の撮ったり、携帯電話で村外と話したりすると、注意深い目を向けるようになっていた。調査環境は快いものではなかった。

村を出る前日に「書記」の妻に相談して、村から勐朗までは、村人のバイクに乗せてもらうことになった。「書記」の妻が、親戚の男のバイクを探してくれるといい、村人の標準からは高い50元と値をつけた。出発の朝には、他家の稲刈りへ労働交換作業に行く「書記」の妻は一緒に乗っていくといったが、筆者のスーツケースをバイクに積むと、場所はもうなかった。30代の男のバイクの後ろに乗って、筆者は村を出発した。

勐朗の町に入る手前の道端では、漢族の警官がいて、検問をしていた。村の男はバイクを停めて、身分証明書を出して見せた。警官と村の男は何か漢語でやりとりしていたが、やがて何事もなくバイクは出発した。後部座席にいた筆者の身分証明書は求められなかったし、日本人だということも認識されなかったようだった。

バイクが出発した後で、運転している男に、警官と何を話していたのかと聞いた。身分証明書を検められたあとに、警官にヘルメットを被っていないことを指摘されたそうである。「だから、ヘルメットは、出発前に道端に置いていたら取られてしまって、今から買いに行くところだ。でなきゃちゃんと被っている、と答えたんだ」と男は言った。「漢語がうまいんだね」(Heh[˥] Pa[˥] hkaw[˥] yaw[˥] pui[˥] ja[˥] ne[˥].) と言うと、「できるさ」(Yaw pui[˥]-a) と男が言った。「まったく、でたらめ言って、口が立つね」(He[˥] pui[˥] ja[˥]) と言うと、男は楽しそうに笑った。

小雨が降る中をバイクは走り、やがて瀾滄県の県都勐朗に着いた。筆者は運転してくれ

た男に 50 元を渡したが、男はそれを見て何か考えているようだった。「書記」の妻がつけた金額については知らされていなかったのかもしれない。男を別れて、スーツケースを引きながら筆者は民族宗教局（民宗局）へ向かった。局長のラフ人 D 氏¹¹⁰は、漢語の書類を、ときどき鉛筆で線を引きながら、読んでいた。筆者の姿を見ると、「帰ってきたか」とひとこと言っ、部下のラフ人男性にお茶を出すように言うと、再び書類に目を落とした。しばらくしてようやく書類を読み終わると、「仕事が多くて。終わらない。ヘパがたくさん仕事をもってくるので、終わらないよ」（*Kan̄ mā jā. Mā peu., Heh̄ Pa. te lā mā jā leh mā peu.*）と笑って言った。時間は 10 時過ぎで、局長は筆者に、しばらく待って昼食と一緒に食べるようにと言ったが、筆者は、調査の札を言い、これから思茅まで行きたい、暗くなる前に着きたいと固辞した。局長は、部下のラフ人男性に筆者をバスターミナルまで送らせた。荷物を半分もってくれた部下のラフ人は、筆者がチケットを買い、ミニバスに乗るまで付いていた。筆者がちゃんと思茅行きのミニバスに乗り、他所に勝手に行ったりしないように見張っているのではないかと思ったぐらいだ。

局長の「ヘパがたくさん仕事をもってくる」という言葉は、頭に残った。ラフ族自治州政府で働いており、民宗局局長という地位にある人が、「ヘパ」（漢族）という他者に仕事をさせられているといった言葉を吐いたからだ。ここで「ヘパ」は、政府であり、中華人民共和国という国家の象徴である。自治州政府で働く、地位の低くない役人でも、ラフ人である限り、「ヘパ」が主人である「他人の国」に暮らしているという感情をもっているだろう。「ヘパの国」（*Heh̄ Pa. mvuh̄ mi.*）とラフ語で呼ぶように、中国の主人は「ヘパ」であり、ラフ族はその中でより低い地位で暮らしている。

¹¹⁰ D 氏の名前である「理保」（*li3 bao3*）も、ラフ語名 *lī pō* の漢語表記である。